

Frank Tobin:
Meister Eckhart: Thought and Language
University of Pennsylvania Press, 1986, pp. xiii+229.

古 牧 徳 生

本書は、エカルドゥスの思想を、ラテン語とドイツ語両方の著作から再構成し、さらにその表現の媒体となったドイツ語の技法を分析することで、彼の言語観が思想にまで一貫して反映されていることを示したものである。著者はネバダ大学のドイツ語教授であり、中世ドイツ思想、文学などについて多くの論文がある。

本書は、序文と結論を除き、五つの章より成っているが、このうち第一章「背景」はその名の通り、エカルドゥスの年譜と当時の時代背景、ならびに彼の最晩年を襲った異端審問についての概観である。この部分は初学者のための導入篇である。また最後の第五章「言語の師」は、ドイツ語説教に見られる逆説、単語の語順の入れ替え(chiasmus)、対句、語呂合わせ、などの数々の技法を実例をあげて解説したものであり、文芸方面からの研究者には有益であろうが、思想研究としてはさほど重要ではない。従って、本評においては第二章、第三章、第四章について、概評する。

第二章「神と被造物」は本書の論述の基礎をなす部分である。ここで著者は *esse* とその関連事項に多くの頁を割き、当時のスコラ学の基本概念を説明していくことで、エカルドゥスの思想の中心的術語が持つ意味を明らかにしていく。

神と人間はどちらも存在しているもの、*ens* であるが、この場合どちらについても同じことがいわれているのだろうか？無限なものと有限なものを同一の概念に一括できるだろうか？以下に著者は一般のアナログ論について説明し、「帰属の類比」と「配分性の類比」の二種類があることを説明する。そしてエカルドゥスが『バリ問題集』から『三部作』に至るまで述べているのは、一貫して「帰属の類比」であることを明らかにする。すなわち *esse* は神においてのみ認められており、被造物それ自体においては認められない。彼のアナログ論の本質は、神と被造物をいかなる単一の概念でとらえることをも拒否するという点にある。では神だけが *esse* ならば、被造

物は何なのか？エカルドゥスによればそれは無である。

ではそうした被造物が持つ esse とはいかなるものか。ここで著者はトマスとの比較を試みている。トマスによれば、被造物の esse とは本質と「共に創造された」原理であり、創造の瞬間に生じるものとされていた。つまり esse は、本質を現実化し、それを存在せしめる原理なのであるが、これは本質によって限定された、造られた esse について言えることである。そしてこの esse は、esse subsistens としての神の esse に与かるが、だからといって神の esse と同一なのではない。従って被造物がそれによって可能的存在から現実的存在へと引き出されるその esse は、神の esse とは別であることになる。この点でエカルドゥスは異なると著者は主張する。彼にとっては、esse とは完全に神だけに帰属しているものであり、神そのものとされているからである。

このようにエカルドゥスは esse を神にのみ帰することで、神と被造物を完全に分離しているのであるが、だが同時にそれらが一であることも示している。つまり被造物が二種類の存在を持つことを説明することによって、被造物における神の現在だけでなく、神における被造物の現在も強調するのである。ここから被造物が、それ自体としては神とは完全に異なり、まったくの無でありながら、神との合一が説かれる基礎が提示されることになる。被造物が持つ二つの存在、すなわち「潜勢的存在」esse virtuale と「形相的存在」esse formale のうち、後者は被造物それ自体としての存在であるのに対し、前者は神において直接的に持つ存在である。「形相的存在」にのみ注目する時、被造物は無として、神との断絶ばかりが強調されるのに対して、「潜勢的存在」については、esse は神にのみ帰されるものである以上、被造物の神性、神との同一性が説かれることになると著者は言う。そして、こうした二つの存在に基づく被造物の神性と無性という相反する両面のうち、常に一面だけしか語られなかった点にエカルドゥスに対する誤解の原因があると言う。実際の被造物の本性とは、神性と無との二重性あるいは緊張関係そのものなのである。

第三章「言語の本性」においては、次の第四章、第五章の前提として、エカルドゥスが言語についてどのような観念を抱いていたか論じている。まず神名形成の五つの方法を説明し、エカルドゥスはそのうちの「否定の道」を支持していたこと、その哲学的背景として彼のアナログア論があったことを指摘している。トマスにおいては、善などの性質は神にも被造物にも実際に存在している。卓越の道により、神に善を帰

する時、被造物において認められる同一の善が、より積極的に、より卓越した在り方で、神の中にあるとされる。だがエカルドゥスによれば、アナロギア関係にあるものにおいては、こうした属性はいずれか一方にしか存在しない。人間の知識は被造物に由来する肯定的属性に基づいて概念を形成する以上、そのような肯定的属性を神に帰するのはふさわしくない。神と被造物は余りにも異なっているから、被造物がいかに真や善を有していたとしても、神の真や善に比べると、それらは無なのである。こうした概念的言語に対するエカルドゥスの低評価を踏まえた上で、そうした言語観から、彼の最も個性的、特徴的諸テーマを（第四章）、さらに表現方法、修辭的、詩的文体などを（第五章）著者はさらに論じる。

第四章「特徴的諸テーマ」においては、まず「義人」のテーマが取り上げられる。このテーマはラテン語ドイツ語のいずれにおいても詳細に論じられているし、『正義と義人』の相違を理解するものは誰であれ、私の語ったすべてを理解する」とエカルドゥス自身が述べているからである。ついで「子の誕生」について、最初は「義人」のテーマとの比較から、次に神の内なる三位一体との関係において、著者は論じる。「子の誕生」を三位一体と結びつけることは、受肉についても新たな視点をもたらす。神が人となった目的は、人が同じ神となることとされる。そのためには人間は、神の本性と一になるために再生しなければならない。その際に働く恩寵について、トマスとの比較を著者は試みる。トマスにとっては、恩寵とは人間を、その本性を越えて高めるものであり、人間の本性にとって代わるものではなかった。本性の完成として、あくまでも本性を前提にしていた。それに対して、エカルドゥスにおいては、恩寵は、本性を高めるものではなく、それ自体としては無である人間固有の状態から、神である *esse* へと人間を高める手段なのであり、人間の本性そのものは否定的にしか見られていなかった。著者はこの後、「離在」とか「像」(*imago, bilde*) について説明した後、「魂の火花」について、創造された魂の内なる力と考え、御言葉ではないとする。「火花」の最も重要な機能とは、アナロギア論によって作られた神と被造物のあいだの深淵に架橋しようとする試みと著者は考える。最後に「精神の貧しさ」を論じ、このテーマが追求していることとは「形相的存在」を棄て、「潜勢的存在」の状態に復帰し、神と一になることであるとする。つまり被造物が創造以前に持っていた、神との同一性そのものこそ「精神の貧しさ」であると説明し、「子になること」とか「突破」などは被造物の神化という一つのことについての二つの描写であるとする。

本書において圧倒的に重要なのは第二章である。この章は以下の章全体の基礎であるばかりでなく、エカルドゥスの思想を解明する上で最も大切な彼の *esse* 観について、アナログア理論から説明しており、本書中、最も有益な箇所である。ただ著者が本質的にゲルマニストであるためか、神としての *esse* と被造物の関係を論じるに際して、今日最も関心を集めている「本質的始原」(*principium essentiale*) 論の観点からの議論がなされていない。そのためアナログア論、被造物の「潜勢的存在」と「形相的存在」、神と被造物の関係などについての説明に、ややまとまりを欠いた点が惜しまれる。

また 61 頁において、被造物の二つの存在のうち、「潜勢的存在」を被造物の *ratio* と同一視しているのはよいが、14 行以下においてこの *ratio* を事物の *quod quid est* つまり本質と言い換えているのはおかしい。評者に言わせれば、これは *quo est* の間違いではないだろうか。本質はむしろ「形相的存在」の方に近いように思える。

さらに方法論的な問題をあげるならば、ラテン語著作との関係において、ドイツ語説教をどう評価するかという点において、著者は相当融通無下なところがある。批判的校訂版作成の過程から明らかなように、ドイツ語説教はラテン語著作と等価ではない。それはあくまでラテン語著作の光の下でのみ研究対象としての価値を持つものと評者は考える。その意味では、両者は截然と区別されるべきではないだろうか。確かに著者はラテン語ドイツ語両著作によく通曉しており、一つの体系としてエカルドゥスの思想を再現することにはかなり成功している。だからこそ、あくまでラテン語著作によって第二、第三章の理論篇を説明し、ドイツ語説教は補足、実例として、第四、第五章の応用篇に限定するという形式を取ってもらいたかった。もっともこれはゲルマニストとしての著者の信念に触れることかもしれないが。

ともあれ、本書は英米系のエカルドゥス研究においては、Kelley の *Meister Eckhart on Divine Knowledge* (Yale University 1977) 以来のまとまった研究書であり、エカルドゥスの神秘的テーマへの哲学的分析という点では、こちらの方が成功しているものと評価する。初学者、あるいはゲルマニストにはこちらを勧める。
